

コロナ自粛における子どもや保護者への影響を、愛着の視点から考察する。

濱田 誠二郎

はじめに

本稿では、新型インフルエンザ (COVID-19) によって家庭教育、学校園教育にどのような影響があったかを、現場の子どもへの参与観察や教師へのコンサルテーションを中心として、幼稚園教諭、小学校教諭、幼稚園長、小学校校長の協力を得て考察した。

さらに、気になる子ども、保護者がいる学校園を絞り込み、参与観察、教師、保護者、校園長との面接を実施し、教師へのコンサルテーションをまとめたものである。

コロナ第1波、第2波とマスコミ等で話題になっている中で、秋冬での例年のインフルエンザと重複したときの、子ども、保護者、教師たちにどのような支援が可能なのかについても提案していきたい。特に愛着障害に視点を置いたのは、コロナ自粛で母子関係が大きく変化した家庭もあると予想したので、本研究の中心とした。

## 1 愛着障害 (様) の表出

### (1) 愛着障害の定義として

精神医学、心理学者方面では様々な定義が提案されているが、本稿では、ビビアン・プライアダーニヤ・グレイシーを支持する。

日本では、愛するという言葉が日常的に使用されているとはいえない。むしろ、今いるところが安全で、安心感が得られるという欲求に基づいた考え方である。

一部の草食動物のように生まれてほどなく、自分の身を守るすべを持たない我々人間の場合、乳幼児は、誰かの保護がないと生きていくことができない。だからこそ保護者・養育者に対して安心感を求めて愛着を持つ。この場合、保護者や養育者は愛着対象となる。愛着は乳幼児が、養育者とのまなざしの交換や、微笑みを受けて

抱っこをされ、泣けば食物 (ミルク) を与えられたりオムツを替えてもらったりという肌と肌が触れ合うスキンシップの中で形成される。

乳幼児は養育者から様々な世話、関わりをされる中で、信頼できる安全基地として親を受け止める。この信頼関係は子どものその後の成長に欠かせないものである。

愛着理論を提唱した精神分析家のボウルビイは、身近な養育者、特に母親との愛着がうまく形成され、親を安全な港と認知することで、社会的、生理的にも心理的にも健全に成長することができることを唱えた。子どもは親という、困ったときに、いつでも戻ることができる安全な場所が確保されていることで、徐々に親から離れて、外に出て、他人とのかかわり学んでいく。そして、自分でやってみたい、できそうだという自立への一歩を踏み出すのである。さらに、子どもが社会に出て自立していくには、疲れたときに受け止め、癒してもらえ、恐いときには、抱きしめて安心を与えてくれる安全基地の存在がとても重要である。

これはすでに述べた一部の草食動物以外の動物において生まれたばかりの赤ちゃんが、他者から守ってもらわなければ生きていけない、成長できないという状況を引き起こす。人間は生理的早産としてこの世に誕生する。それゆえ、赤ちゃんは自分が周りの人に守ってもらえるように「泣く」という行為で養育者にSOSを発する。愛着によって特定の他者を求めることで、この身体的な安全と心理的な安全を確保していく。これらは、生まれつき備わった能力と考えられている。愛着行動とは、乳幼児に、ストレスがかかると、養育者など愛着関係を築いた特定の相手に対して、親密さを求めるために行う行動ともいえる。つまり、愛着関係で押さえる

べき点は、「ストレスがかかる状況」における行動だと言うことであり、愛着行動は、乳幼児が身近な養育者に甘えたり、なついたりすることだととらえるのではなく、ストレスがかかる状況で養育者に見せる行動だと捉えることもできるだろう。そして、その愛着行動には3種類ある。

#### A 発信行動

愛着関係を築いた相手の注意や関心を「泣く」「大声をあげる」などによって、自分の近くに来てもらおうとする行動のことである。泣く、手足をバタバタさせる、体をゆする、養育者をじっと見つめる、追視行動、喃語を使うことも微笑んだりすることも発信行動の一つと言える。

発信行動は特に、立つまでのしばらくの時期に、寝返りや、ハイハイを覚えて自力で移動できるようになるまでに、見られる愛着行動である。身近な養育者は、愛情を深め、乳児のそばにいる時間が長くなる。この段階は誕生から少なくとも8週まで、一般的には12週頃まで続くといわれている。

#### B 接近行動

接近行動とは、何とか愛着関係を築くことができた相手に自ら接近して、関わってもらいたい、注意を引こうとする行動のこととされている。乳幼児が養育者に前から、後ろから抱きつく、後追いする、しがみつく、寝ている身近な養育者の上に乗ってくる行動が接近行動の主たる様態である。養育者から少し距離を取り始める頃、ハイハイや一人歩きを覚えて自力で移動できるようになると、接近行動が増えていくことが知られている。この段階は生後6カ月ころまで続き、人に対する親密な行動が母性的人物に対して顕著になる。言い換えれば、困ったときに帰る、戻る「港」を求めて安心感を得るのだと思う。特に、生後3カ月から6カ月の間は、乳児の大部分が愛着行動を顕著に発達させる感覚鋭敏期にあたとされ、愛着形成期ともいわれる。

#### C 定位行動

定位行動とは、すでに愛着関係を築いた相手を探して、確認するとともに安心を得ようとする行動である。養育者を目追って探したり、養育者の声が出た方を探しながら振り向いたりして居場所を確認するのが定位行動である。定位行動は、簡単そうに思えるかもしれないが、追視(動く物を目で追うこと)、視力や視野の向上、声の分別など、多くの能力を使うことが必要である。

赤ちゃんが定位行動を始めるのは、首がすわり、おすわりが何とか出来始める前後である。この段階は生後6カ月から7カ月の間に始まり、2歳ころまで続く。乳児はますます周りの人たちを区別して人に接するようになり、外出する母親を追う、あるいは外出させないように注目行動をする。また、帰宅した母親に抱き着くこともあるかと思えば、無視するかのようなひきつけ行動すらする。このように、探索行動のために母親を利用する反応が現れ、同時に誰に対しても示された親密な反応は減少する。

ある特定の人が愛着の対象人物として選択され、他の人たちは選択されなくなる。愛着の形成には、乳幼児期に、養育者との間に、ことばを越えたノンバーバルコミュニケーションが継続的かつ密接に行われることが重要である。赤ちゃんは、自分を守るために、愛着行動を駆使して養育者の注意を引き、養育者から愛のこもったお世話をたくさんしてもらうことで安全や安心を感じ、愛着関係を築いていくと考えられている。今、幼稚園、小学校で参与観察を続けているが、低位行動の時期における母親の関わり方に課題があると考えられる事例が多い。

#### (2) ボウルビイの愛着理論

##### ①第一段階

新生児期の赤ちゃんは、手の平に指をおくとぎゅつとにぎる、いわゆる原始反射で刺激に反応する。他にも、唇に乳首が触れると吸い付く哺乳反射などがある。また、新生児微笑、自発的微笑など、偶然の微笑みを見せることもある。偶然にも関わらず、これらの行動に出会うと、

母親など養育者は、赤ちゃんをかわいいと思い、積極的に関わりお世話しようとするようになる。

このかわりには、父親にとっては、欠かせない学習の場でもある。それは、産みの苦しみを経験していない父親は、子どもとのノンバーバルコミュニケーションによって、より愛情が深まっていくからである。第一段階は、赤ちゃんが生まれ持った反射や微笑で周囲の大人の心をひきつける本能的なしぐさにより、養育者の自発的な関わりやお世話をせざるおえない行動を引き出す学習をする。養育者の温かいまなざしが子どもの社会を少しずつ広げていくと言える。

### ②第二段階

原始反射は、多くの乳児は生後3ヶ月～4ヶ月頃に消失することが多い。刺激の対象が無差別に反応することが減り、自分にとって大切な身近な養育者やいつもお世話をしてくれる人を好んで関心を引こうとしたり、快の反応をしたりするようになる。

双方向のコミュニケーションの初期とも考えられる。話しかけられると目や口元を見つめて、微笑み、喜んで反応するが、見知らぬ人の場合は、無反または不機嫌な顔をして後ずさり、泣き出すことすらある。この時、父親があまり関わっていないと、子どもは正直に反応するので、成育歴を探るうえで、ポイントではないだろうか。

### ③第三段階

子どもが自分の意志で、徐々に愛着行動がはっきり行動化されてくる時期と言える。生後4か月から6ヶ月頃の赤ちゃんは、身近な養育者とそれ以外の人を、だんだんと区別するようになるが、明確な区別ではなく、知らない人に対しても機嫌のよいときは、愛想よく興味を示す。だんだんと、知らない人に対して不快な表情をすることが増える。遠方に暮らす祖父母との対面時にはよくある光景である。子どもの内面的には、相反する気持ちが小さな葛藤をするようになる。人見知りの始まりである。父親との関わりが乏しい赤ちゃんの場合は、仕事から帰っ

てきた父親を避けたり不快な表情をしたりすることもある。また、ハイハイを覚えると養育者の後追いを始め、付きまとい、しがみつき、身体によじ登ろうとして、抱っこしてもらえるまで、泣き叫ぶこともあるが、養育者の反応や養育者との距離によって泣き方や叫び方を変えるなど、本当に泣いているわけではなく、注意を引くための行動のことも多い。愛着関係が十分に形成されている場合、子どもは、養育者に接近するだけでなく、養育者を心のよりどころ(安全基地)として周囲に積極的に働きかけていくようになる。

### ④第四段階

愛着関係に全く問題、課題がない家庭はないと考えている。しかし、母子関係に大きな問題がない場合、養育者がその場を離れても、安心感が根底にあり、子どもはきっと戻ってきてくれるという確信があるので、待つことができる。つまり、目には見えないが、必ず戻ってきてくれることを想像できる、それは自分を大切にしてくれるから、放っておかないという確信から生まれる。

愛着とストレスの関係性について、他者からの受容や信頼感を育む基礎となるのが愛着関係であるとし、適切な愛着関係を築くことができなかった子どもは、他人を思いやったり、受けた優しさを感じ取ったりすることが苦手な場合が多い。

人間関係を構築する上で、かなり不利となる。せつかくの優しい言葉さえも、相手の言葉を否定的に受け取る、攻撃的になるといった傾向がある。それとは逆に、愛着関係がそこそこ良好に形成されている場合は、相手がその子どもに関わろうとする感情を引き出すことがうまく、安定した愛着対象を身近におけるため、お互いストレスを感じにくい。

愛着がうまく形成されないと児童の生理面や心理面、対人関係に様々な影響を及ぼしていると思える例が小学校で増えている。スピッツのホスピタリズム論では病院、乳児院、児童養護

施設など母親のもとから離れて暮らすことにより、心身の発達の遅れや情緒の障害が引き起こされるとして特定の養育者による個別の関わりの有効性を指摘した。

子どもは、加齢とともにこの愛着という土台が安定性を増し、社会的行動・対人関係の基礎となるとされている。子どもの心に安心感、信頼感という内的作業モデルが形成された人は、他者・世界との関係が円満かつ肯定的で良い人間関係を築きやすいとされている。さらに今回のようなコロナによる自粛環境の変化への適応力もある程度備えている。身近にいつもと違う事態が起こっても身近な養育者がいるから大丈夫だと思えるからであろう。逆に内的作業モデルが不安定な子どもは人を心から信頼することができないために、環境の変化に不安定な感情表現を示し、対人関係にも支障をきたしやすい。

マターナル・デプリベーション（母性剥奪）については、よく知られているように、今の乳児院等の福祉施設の原型の孤児院で暮らす子どもたちは、安定した家庭で育った子ども比べて高い死亡率が見られ、発達の遅れも有意にあった。その原因の一つには、母親や身近な養育者との心のつながりが欠落していることによるものもあった。当時の施設は、子どもの人数に比べ保育士が圧倒的に不足していたことも要因と考えられる。しかし、物の豊かになったと言われる現代において、施設だけでなく一般家庭にも起こりうることである。

## (2)愛着障害の子どもの行動や特徴

岡田尊司（2015）は愛着には4つのパターンがあり、「安定型」、「回避型」、「抵抗・両価型」、「混乱型」に分けた。

安定型は愛着が形成されたパターンで親に対して愛着行動を示すことも多い。親と離ればしばらくは泣き、親と再会をすれば表情豊かに喜び、スキンシップを受け入れる。これは、親を安全基地と認識しているために、親と離れば不安を抱き、親といれば安心する。幼稚園・

小学校低学年において、4月当初は戸惑いがあったとしても比較的適応しやすいタイプである。

回避型は、ネグレクトを受け続けた児童に時々見られる。親と離れても反応がうすく、進んで抱き着いたり、手をつないだりといったスキンシップをしようとしにくい。安全基地を持たないために、愛着行動を起こそうとしにくい。

抵抗・両価型は、母親から離されると激しく泣き叫び、すぐに泣き止まず周囲の大人が苦慮するタイプである。母親が現れて抱こうとしたとき、近くの保育士等に抱き着き、見せつけ行動をすることもある。根っこに不安があるので、いったん母親に密着すると、なかなか離れない。

親が関わってくれるときと、無関心のときの差が激しい場合や逆に親が神経質で過干渉の場合見かけることもある。愛着が不安定なので、その後、不登校や不安障害になるリスクもあり、円滑な人間関係が築きにくいことから、いじめの被害にも遭いやすいとされている。

また岡田はさらに、安定な愛着状態の児童は、周囲をコントロールすることで足りない愛情や関心を補おうとすると述べている。これは「支配的コントロール」、「従属的コントロール」、「操作的コントロール」に分類される。

支配的コントロールは、暴力や心理的優越によって相手をコントロールしようとする。逆に従属的コントロールは、相手に気を遣いすぎて従順を装うことで、相手からの関心を引き出そうとする。一見するとコントロールとは正反対に見えるが、相手に従う姿勢を見せて、気に入ってもらおうようにすることで、相手の気分や愛情をコントロールしようとする。

操作的コントロールは、支配的コントロールと従属的コントロールが組み合わさったものである。相手に強い精神的なインパクトを与えることで、同情や共感や反発を引き起こすことによって相手を思い通りに動かそうとする。大人は、なるべく子どもの機嫌を損なわないようにふるまってしまうと、どんどんエスカレートしていく。

愛着障害は確立された診断方法がなく、診断をすることが難しい障害である。参与観察や半構造化面接を進めていくうちに、母子共依存、虐待等と深い関係があることが見えてきた。

## 2 集団生活での困り感

### (1) 愛着障害がある子どもの主な特徴と課題

愛着に課題があり、愛着障害かもしれないと思われる子どもの多くは集団生活での困り感がある。これは、保育・教師たちが異口同音に語っている。しかし、家庭では大きな問題と感じられず、幼稚園・保育所や学校から保護者にどのように伝えるべきかが大きな課題となっている。

孤立しやすく、友達が少なくなり、自己判断が不得意といった、自分に自信を持ってない行動をとることもある。こういった行動は、養育者との距離が近すぎても離れすぎても起こる愛着障害の特性である。の保護者の一部は、家庭では問題がないのに学校園でのみ問題があるのは、教師・保育士の指導に問題があるのではないかという、ある種クレマーになるケースが実感として増加している。

### 愛着がうまく形成されない原因として考えられる理由について

- ・対象者との死別・不本意な離別
  - ・虐待やネグレクトを主要因とした虐待 等
- このような要因が背景にある場合、愛着形成をする対象者に危害を加えることもある。当然、育った環境が安全でなかった場合、しっかりとした愛着は形成されない。
- ・養育者の役割の人が複数人いて、お世話をしてくれる人が頻繁に変わることで、感情が不安定になる。
  - ・最低限の世話はするけれど、無関心・放任する場合、人との適切な距離感がわからない。
  - ・自分以外の兄弟姉妹を可愛がる場合、不安は増幅される。」
  - ・対象者が自暴自棄な振る舞いや自殺未遂などを行っている時には、失う恐怖から母親から離れ

られない。というケースも、聞き取りの中で、少なからず見られた。

### (2) 学校園での対応

#### ①関わり続けることをあきらめない

愛着障害は、愛着が形成できていないことで起こることはすでに述べた。そのため、養育者とは違ったアプローチで関係を築き、愛着を形成することも可能である。そして、心理的な基盤ができ行動が徐々に安定するケースもある。また、夫婦が役割を構築して、愛着を形成し直すことができることもある。

愛着障害の子どもは、表面的にはふてぶてしい態度をあらわす場合もあるが、本音は、振り向いてほしいという気持ち強い。授業中や保育中に「これ、いいね!」「この色うまく使ったね!」など、行動に注目してほめることが、子どもの心に響きやすい。幼児や小学校低学年であれば、周りの目を気にしない、不適切な状況でも教師によってくる、など過度な行動が見られることがある。そのため活動・授業で「その子が周りの子から、良い意味で注目される場面を設定したい。

#### ③教師・保育士が心地よい距離を模索する

愛着障害の子は教師・保育士に常にくっついて来ることが多い。スキンシップには、セロトンやオキシトシンなど、子どもの心を安定させ、脳の発達を促す効果があることは知られている。

そのため愛情が不足すると、子どもは自然と安心感のある人へスキンシップを求めに行く。これは、愛着障害の子に限らず、突然不安に駆られて、スキンシップを求める子など、幼児期、児童期前半では多く見られる。

#### ④共感する

これまで述べてきた類型を陽性の反応とすると、逆に陰性の反応を見せる子どももいる。

過度に良い子であることをアピールしてしまう場合がある。これは虐待、DVがあった家庭では、良い子でないと大切にされない、という不安回避に由来するものであるといわれている。

ある時、他の子の問題行動を逐一報告にくる女児がいた。「自分はこんなに良い子なのです」をアピールしているように見えた。その他にも痛くても泣かずに我慢する、いじめられても笑ってしまうなどの行動が見られる場合もある。

昨今、いじめ指導をむずかしくしている要因に、「笑っていたから、大丈夫だと思った」など、とんでもない言い訳をする加害児童に何人も出会った。

通常、怪我や困ったときは顔が引きつり、身近な養育者に泣きついて、「大丈夫？痛かったね」と慰めてもらって、体と心の状態が安定を取り戻す。その他、悲しい、悔しい、などの陰性の行動を表す子どもには、子どもとの距離を考えながら、相手が不快な感情を持たないように、適度な距離間を保ちつつ支援することが大切だと考える。不快あるいは嫌な体験が襲ってきたときに、その子にとって、愛着関係ができていない人に泣き、慰めてもらうというプロセスを体験する。この適切な経験があるから、いじめがあっても誰かに相談し、解決することができるようになる。嫌なことは堪えてばかりでは、解決しないと学習の仕切り直しも必要となる。子どもの認知は十人十色で、しっかり共感、言語化する場合、見守る場合、教職者にとってケースごとに良い勉強になることだろう。

### 3 幼稚園の事例

#### (1) 5歳女児A

<子どもの様子>

コロナ自粛以前にできていたことが、できにくくなったことが多くなった。

気分のムラがある。自分の思い通りにならないとき、構ってほしいとき等気持ちが止まらず激しく泣き続ける。(衣服、靴の着脱や給食、片付けを手伝ってほしい、抱っこをしてほしい、隣にいてほしい等) (上靴を履いたまま水たまりでパシャパシャして遊びたい、給食をずっと隣で食べさせてほしい、食べている間もずっと見ていてほしい)

・気持ちが落ち着いているときは片付けや衣服の着脱ができる。

<教師や保護者へ>

・教師やお迎えの保護者の足元に勢いよく抱き着く。大人なら性別や年齢関係ない様子。それに伴い、部屋から出ていく。本人に「あぶないしびっくりしちゃうからやめようね」と伝えても、うまく伝わっていないようで、笑顔で話を聞く。抱き着きが遊びになっているように感じる。走り出した瞬間に止めても抱き着かないと納得できず「まいちゃん(仮称)はあのお母さんにぎゅってするの!」と言いながら激しく泣く。

<参与観察から小考察>

筆者は昨年より、A幼稚園にスクールカウンセラーとして入っている。本児は年中クラスに在籍しており、4月のコロナ自粛で十分な参与観察はできていないが、6月からの再登園時より、砂場あそび、制作活動等で参与観察を続けてきた。両親は共働きで、コロナ自粛時期もあって母親はテレワークが多くなった。今まであんまり関われなかったという思いから、日々子どもと過ごすための計画表をつくり、子どもがしたいように合わせてきた。この過剰なかかわりに母親がだんだんと疲弊してきた。

母親との面談で、仕事に追われて子育てを祖母や幼稚園に頼り切りになっていた自分がいやで、それを取り戻そうとした。しかし、がんばればがんばるほど、子どもが赤ちゃん返りしていくことで、自分の子育てに自信がなくなり、子どもと一緒にいることが苦痛に思えることが多くなった。

この事例は、子どもの目線から見た時に、コロナ自粛は、子どもにとって、理解不能な大きなライフイベントであった。それに加えて、母親からの急な接近行動は、戸惑いの方が大きく、安心感にはつながらなかったようだ。

母親を、十分にねぎらったうえで、これからの関わり方について、小さな努力でできることをスモールステップで共に考えた。

良かったこととして、幼稚園担任も同席して3人でこれからのAへのスモールステップを計画できたことは大きな収穫だと言える。

## (2) 6歳男児B

### <子どもの様子>

- ・朝、部屋に入るのにためらうことが多い。「怖い」「ランドセルポストが嫌だ」などと言いなかな部屋に入らない。
- ・幼稚園内をウロウロする。部屋の前まで来ても走り出して、門から出ていこうとする日もあった。週末や午前保育の日は、「行ってきます」と元気に部屋に入れる日が多い。
- ・全体登園が始まってから、机はB児専用の机と固定の位置を作ることで落ち着いて生活できた。
- ・制作(絵を描く)は思い通りにできないと、「駄目だ」と叫び、濡れたティッシュで拭いて消す。7月後半は消そうとした絵を一部分褒めることで、徐々に全体も消さなくなった。
- ・バイオリン鑑賞では、嬉しそうな表情を始めでは見せていたが、3回目の時は「やめてー」「もう嫌だー」と耳を塞ぎながら大きな声を出していた。クラスが賑やかで雑音が多かった雰囲気だったので嫌でパニックになったように感じた。音声へのこだわりを感じた。
- ・「やることリスト」など視覚的なものがあるとよく読んで行動する。

### <教師や保護者の願い>

朝は、スムーズに部屋に入ってきてほしい。何が怖いのか、賑やかで他の友達が仲良くしているのが嫌で部屋に入らないのか、「怖い」という口癖の意味がなかなかわからない。

Bに合った保育や言葉がけの方法が知りたい。母親は懇談で、「クラスのやんちゃと噂を聞いているCくんと関わりが気になる。」と言っていた。1学期は、「お互い関わる事がなかったのでわからない。」と伝えた。母親は、関わらないようにしてほしいのではなく、お互い活発だから喧嘩にならないか心配していた。と

言葉では言っていたが、いかにも迷惑そうにしていた。(母)友達と会話ができると嬉しい。Bが、焦らないように声をかけ、様子を見たりするが、どうしても対応できない時もあるので困る。Bのペースで少しずつクラスや友達に慣れていけたら良いという希望を語った。

### <教師や保護者の願い 2>

担任は保護者から「5～6歳はこんなものですかね?」と聞かれた。幼さを感じている様子だが大きな困り感はないように見えると答えた。次のような願いも語られた。

- ・安心、落ち着いて保育室で過ごせるようになってほしい。
- ・どこまで本人の気持ちを受け止めてあげるべきか。要求を通したい場合と、気持ちが高ぶりすぎてパニックになっている場合がある。できる限り本児の気持ちを受け止めてあげるよう努めているが、いけないことは止めており、その際激しく泣く、パニックになる。どう伝えたらよいか難しく、つい甘やかしてしまう。
- ・急な抱き着きが危険なのでやめさせたい。

### <小考察>

本事例についても、以前から特性はあったものの、コロナ自粛が始まって特性がより顕著になったと思われる事例である。

聴覚過敏の特性も少しあるように感じた。自粛中は家庭で、比較的静かな日々を送ってきたが、その環境に馴化した後、再登園で音の洪水の中で過ごすことは、B児にとって苦痛だったと推測する。

聴覚過敏は、あくまでも推測の域を出ないので、担任には引き続き、B児が苦手な場面観察を依頼した。

B児からよく言葉出るに「怖い」がある。これについては、さまざまな不安もあるだろうし、具体の対象物・人も否定できない。家庭では「怖い」が出ないことから、「怖い」の言葉の直前直後にB児が何を見ていたか、また、可能であ

れば周りの子どもからも聞き取り、何があったかを記録するよう依頼した。

#### 4 小学校の事例

##### 8歳男児D

教師が指導的な発言をすると、激高して暴言を吐く。実母、義父と暮らしている。義父からは虐待までいかないが、十分にかまってもらえないもどかしさを抱えている。実母は本児が乳幼児期に離婚問題で育児に目を向けることが難しかったようだ。

義父との面談では、自分の言葉できちんと説明できるようになってほしい。とのことであったが、義父との人間関係ができていない状況では高望みだとも思える。

##### <小考察>

改めて乳幼児期、特に0-2歳までの身近な養育者のかかわりの大切さを痛感した。子育ては気が付いた時がスタートだと考える。命令口調や指示命令が多すぎる両親に対して、子どもに一方的な約束を強要しない。対面はストレスがかかるので、横並びで話を聞く。この2点をコンサルテーションとして担任に依頼した。

##### (3) 11歳女児E

クラスの仲間との距離感がわかりにくく、近づきすぎて敵対関係になったり、自分が孤立してさみしい思いになったりすることもある。母親がうつ病で長期にわたって治療中である。そのため、母親の気分、体調によって子どもへの接し方が大きく変わる。

本児はストレスがたまると、食毛症の様相を示すことがある。

##### <保護者の願い>

元気に学校に行ってくれたらそれだけで良い。友だちとのトラブルはあってもしかたがない。

##### <小考察とコンサルテーション>

高学年女子の多くは、信頼できる相手でない心を開くことが困難である。参与観察時は休み時間には一人で本を読んでいた。しばらく観察していたが、ページをめくる様子がないこと

から、仲間からの声かけを待っているかもしれないと思えた。あるいは、解離状態になっている可能性もあるかもしれないことをコンサルテーションして、少しでも表情が穏やかなときに、さりげない短い言葉かけをするよう伝えた。

##### <おわりに>

乳幼児期における愛着形成が不十分な場合に、保幼小時期になって、人間関係で大きなひずみが起こることが多い。

課題として浮かびあがってきたのは、保護者に危機感が薄く、学校園での困り感であって、家庭では大して困っていないという主張も多く、まるで、学校園の指導体制だけに課題があると聞いたような保護者も多かった。

現場にベテランが減少してきたこともあり、保護者対応の教育技術がなくなっていることは大きな不安材料でもある。

**With Corona** 一部のマスコミで言われているが、それは、正しく恐れるなど、今までのプロセスをある程度理解できている、思春期後期以降の人向けではないだろうか。多くの子どもにとって、いきなりの休校園や、再登校園はただ戸惑い、不安を助長する。しかも、自粛によって家族の絆が深まった家庭もあるだろうが、逆に、子どもとの距離が近すぎることに双方が違和感、不快感を持ち、それまでは、不安定ながらも低空飛行の家庭生活が築けていたものが一気に崩壊した例もある。

学校園再開後に、以前に比べ異変を感じた子どもの多くが、感受性が強いことを、担任から異口同音聞き取れた。今後、今回のような突然学校園自粛に備えて、災害時の避難訓練のような学習経験を積ませることも必須となるだろう。幼児には、紙芝居、絵本などを用いて、今後も出てくるかもしれない、新型ウィルスに、不安を助長することなく、正しく恐れる学習も必要となる。

「愛着」に視点を当ててコロナ渦を考察した。社会の激変への最大の防御は、0-2歳での身近

な養育者との信頼関係だと改めて痛感した。今回、多くのインタビュー協力者と、この点で全く一致したこと、そして、愛着は仕切り直しが可能という点も共に学べたこと。さらに、このような非常事態に備えて、幼児期・児童期には紙芝居、絵本など視覚教材を用いて、ゆっくり、正しく恐れることを教えていきたい。

## 参考文献

- (1) 愛甲修子 (2016) 愛着障害は治りますか？  
株式会社花風社
- (2) 岡田尊司 (2011) 愛着障害 子ども時代の引きずる人々 光文社
- (3) 山口正寛・山根隆宏 (2010) 養育者の内在的要因が子どもの愛着行動に与える影響 神戸大学大学院総合人間科学研究科  
神戸大学大学院人間発達環境学研究科  
(p 168)
- (4) 橘里夏 児童養護施設における愛着障害児へのソーシャルワークのあり方に関する一考察 (p105～109)
- (5) 米澤好史 (2014) 「愛情の器」モデルによる愛着修復プログラムによる愛着障害・社交障害・発達障害へ支援事例 和歌山大学教育学部心理学教室
- (6) 中野明德 ジョン・ボウルビイの愛着理論 ― その生成過程と現代的意義―  
(p49～53)
- (7) 藤岡孝志 愛着臨床と子ども虐待  
ミネルヴァ書房
- (8) イルセ・サン 心がつながるのが怖い 愛と自己防衛 ディスカバー